

# 「パックス・モンゴリカ」時代の 文化交流史

## ～環ユーラシア交易網がもたらしたものの～

第16期社会工学研究会  
アジアダイナミズム班

学部生 : 藤川・三浦・矢野  
大学院生 : 菅沼、佐藤、杉、阿達、五十嵐  
中里、中村  
指導教員 : 金美徳、越田辰宏

# Agenda

1. 振り返り（2017年～2024年 論文のテーマ）
2. 研究目的・方法
3. 研究対象
4. 2025年度のテーマ
5. フィールドワーク計画
6. 参考文献
7. 年間スケジュール

# 1. 振り返り（2017年～2024年 論文のテーマ）

モンゴル帝国史の8年間の研究（今年で**9年目**！）

| 年度   | タイトル                      | 頁数  |
|------|---------------------------|-----|
| 2017 | モンゴル帝国のユーラシア興隆史           | 107 |
| 2018 | モンゴル帝国の興隆と衰退              | 244 |
| 2019 | モンゴル帝国と朝鮮半島               | 84  |
| 2020 | パンデミックのユーラシア史とポストコロナ      | 118 |
| 2021 | 倭寇とモンゴル帝国史～海洋の渡海民と大陸の遊牧民～ | 106 |
| 2022 | 華人華僑とモンゴル帝国史              | 81  |
| 2023 | モンゴル帝国の衰退から見る宗教と統治        | 89  |
| 2024 | モンゴル帝国の遺産                 | 229 |

2017年度～2021年度の論文が書籍として出版  
されました(2023/3/30発売 全240頁)



## 2. 研究目的・方法

✓ アジア班が目指す論文は、歴史の視点から「**現代的意義**」を見出す

✓ 「**文献研究とフィールドワーク**」を中心に研究活動を行う

✓ フィールドワークは「**博物館**」訪問や「**専門研究者**」ヒアリングを行う

### 3. 研究対象：「パックス・モンゴリカ」とユーラシア交易路

#### パックス・モンゴリカとは

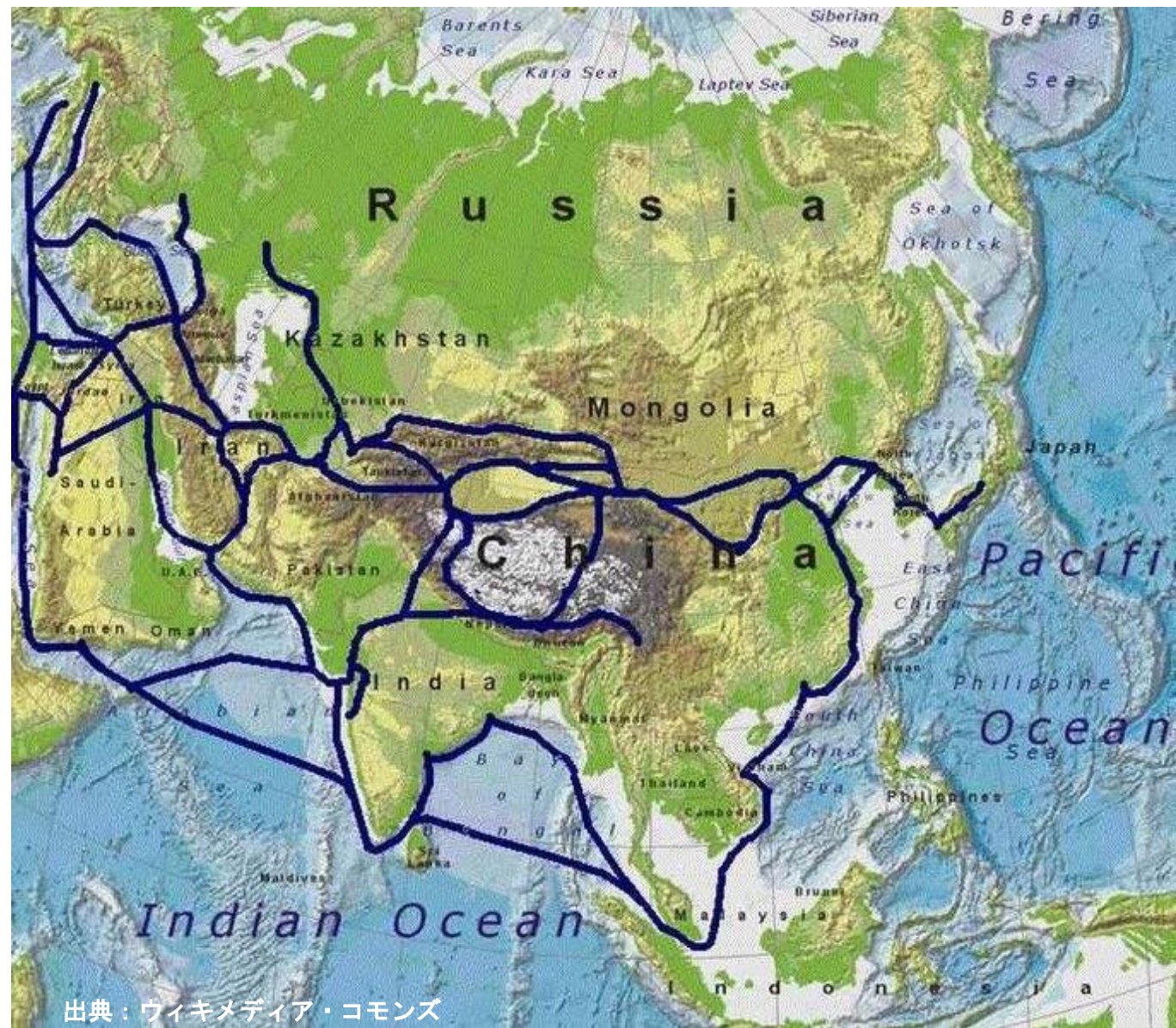
13～14世紀にかけてユーラシア大陸を支配したモンゴル帝国の覇権による安定した時代を、パックス・ローマ（ローマの平和：1～2世紀）になぞらえた言葉である。（パックス（PAX）はラテン語で「平和」の意）

本論文では「モンゴル帝国の支配による広域にわたる政治的安定によって、分断されていた地域が繋がり、人々が自由に往来できるようになり、文化交流が栄えた時代」という主旨で使用する。

Cf.

パックス・ブリタリカ（19世紀の大英帝国最盛期）

パックス・アメリカーナ（20世紀のアメリカ覇権）



出典：ウィキメディア・コモンズ

## 4. 2025年度の研究テーマ

### 問題意識

- 13～14世紀にモンゴル帝国の統治が実現した広域支配圏とその安定（パックス・モンゴリカ）は、分断された地域を結びつけ、異文化の交流を活発化させた。
- 「パックス・モンゴリカ」による文化交流のダイナミズムを、環ユーラシア交易網が実現した物産・技術・文化の相互交流の探求によってあぶり出したい。
- 現在、自国第一主義、戦争・紛争、宗教対立など、世界で進む分断化の動きに対し、モンゴル帝国の歴史から得られる教訓は何か。

### 研究課題

- 「パックス・モンゴリカ」による広域交易、経済圏を実現したモンゴル帝国の統治機能
- 3つの交易路（ステップロード〈草原の道〉、シルクロード〈オアシスの道〉、マリナーロード〈海の道〉）の果たした役割
- 交易された物産、伝播した技術の歴史的意義
- モンゴル帝国が果たした文化圏同士の文化交渉



## 問題意識

モンゴル音楽はどのように遊牧民の自然観・生活・歴史・精神文化と結びつけながら発展してきたのか、また各楽器はどのような背景があり完成したのか

## 研究報告

- ・ 遊牧文化が育んだ音楽→**広大な草原と厳しい気候**が特徴である。馬とともに移動しながら暮らす生活をしてきた。
- ・ 自然と音楽→終わりなく広がる**大地、風の音、動物たちの鳴き声**などが音楽のインスピレーションの源である。
- ・ 移動しながらの生活→特定の場所にとどまらないため、持ち運びしやすい楽器や、一人で歌い上げる歌が主流になった。
- ・ 馬頭琴→**馬のいななきや風の音**を表現。
- ・ ホーミー→**川・風・動物**を模倣した歌唱法。
- ・ モンゴルの楽器→生きる知恵と精神文化の表現そのものである。

## 今後の方向性

- ・ 中国とモンゴルの相違点の調査
- ・ 男性しか楽器を演奏しなかった理由
- ・ 自然観とゆらぎの関係性の有無



## 問題意識

チンギス・ハン時代にモンゴル帝国を支えた食文化はどのようなものだったのか

## 研究報告

- ・ 基本的には動物（羊、やぎ、牛、馬、ラクダ）を主食で食べており、特に羊は重宝されていた。肉だけではなく血も余すことなく栄養として摂っていた。
- ・ 馬肉は儀礼で使用され、宴では大量の馬が料理に使われていた。
- ・ 夏は乳製品を中心とした。（バター、チーズ、ヨーグルトなど）
- ・ マーモットを食べ、ペストの保菌者であることを知り、生物兵器に利用した。

## 今後の方向性

なぜ動物の血や皮までも余すことなく使うようにしたのかを調査  
食文化とペストの関連性も調査

# 三浦雄太：モンゴル相撲と東アジアの文化的関係と共通点



## 問題意識

モンゴル帝国の三大国技の一つであるモンゴル相撲（ブフ）の起源に注目し、その格闘技が東アジアにどのように伝播し、各地域でどのように受容・展開してきたのかを研究する。

## 研究報告

**中国**→春秋戦国時代以前の古代文献に「角抵」や「角力」と呼ばれる力比べの記録があり、軍事訓練や宮廷儀礼の一部として行われていた。また、漢代以降は祭祀的要素も加わり、豊穡祈願や祖先祭祀と関連して力比べが行われたとされる。

**朝鮮半島**→豊作祈願や祭礼の中で行われる「シルム」があり、地面に膝をつかせる点や力強さを競う点でブフや日本の相撲と共通する。

**日本**→相撲も、中国や北方の文化的影響を受けながら、神道の祭祀や宮廷儀礼と結びつき独自に発展してきた。例えば、奈良時代の宮中行事である「相撲節会」や、神社の例大祭で行われる奉納相撲などがその例である。日本相撲においても、相手を地面に倒すことで勝敗を決めるという原理はブフと共通している

## 今後の方向性

モンゴルからの広がり方、またヨーロッパには広がらなかった原因を探る

# 杉由紀：モンゴル帝国の統治体制のルーツを探る



## 問題意識

モンゴル帝国を「世界初のグローバル帝国」たらしめた要素の一つに、**ウイグル**の制度や文字の導入、ウイグル人の登用がある。なぜ、どのようにウイグルの制度を導入したのか。

## 研究報告

- モンゴル帝国は、1210年に帰順してきた天山ウイグル国が、遊牧民・定住民の双方を統治するノウハウを確立していたことから、**ウイグル人**を官僚として多く採用した
- 天山ウイグル国は、ウイグル帝国(744～844年)の末裔。チンギス・ハンはウイグル王家を歓迎し、モンゴル王族に次ぐ地位(駙馬王家)とした
- 官僚のみならず、ウイグル人の民間貿易ネットワークも、モンゴル帝国のユーラシア全域への展開を支えた
- ウイグル帝国の文字や行政制度は、**ソグド人**のノウハウを取り入れて発展したもの。ソグド人は、唐代にシルクロード全域で、交易、通訳、文書作成、金融などで活躍した
- シルクロードの貿易ネットワーク、遊牧民と定住民の両方を統治するノウハウが、モンゴル帝国に受け継がれ、帝国を支えたといえる

## 今後の方向性

- モンゴル帝国の統治ノウハウのルーツとしての、ウイグル人、ソグド人の文献調査を深める
- ウイグル人、ソグド人の貿易ネットワーク、行政手法、文書などによる文化伝達力が、どのように発達したのか調べたい

# 阿達敏洋：モンゴル帝国において紙、印刷、書物の役割



## 問題意識

- ・モンゴル帝国において紙、印刷、書物は情報伝達、経済、文化政策においてどのような役割があり、後世にどんな影響を与えたのか
- ・製紙技術をどうやって他国から取り入れ、印刷技術はどこから入り、言語はどうしたのか。

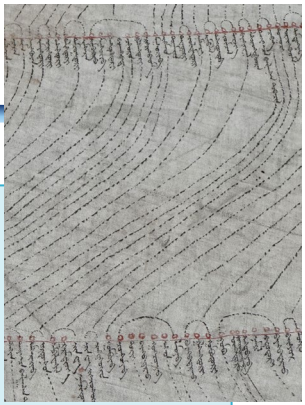
## 研究報告

- ・紙は紀元前2世紀中国で発明され、モンゴル帝国が版図を広げる中、シルクロードを經由し諸国にどのように伝えられたのか
- ・行政制度を統合的に管理するために紙の実用化をどう進めて行ったのか
- ・モンゴル帝国は他国（南宋、西夏）からどうやって印刷技術を吸収したのか
- ・印刷物ではどうやって漢文、ウイグル語等多言語印刷政策を進めたのか

## 今後の方向性

- ・金属活字が初めて作られた、**朝鮮半島での高麗の役割**
- ・高麗の文化が東アジア、モンゴル帝国に与えた影響
- ・モンゴル帝国は自ら新しい技術を発明していないが、確立した技術を巧みに利用している  
広大な**支配地を効率的に統治**するために行政文書等の印刷物が果たした役割

# 佐藤力：モンゴル帝国血統の伝統と現代に繋がる遺産の考察



## 問題意識

- ・ 男系男子のみが正統な支配者とする「チンギス統原理」が生まれた背景は何か？
- ・ モンゴルにおいて家系図は何故重要なのか？

## 研究報告

- ・ チンギス統原理は中央ユーラシアのモンゴル・テュルク系遊牧民の社会において広く見られた王権の正統性に関する思想で、**ハーンの地位はチンギス・ハンとその男系男子によってのみ継承されるべきとする血統原理**。
- ・ 中央ユーラシアの遊牧国家では同一の男系に属する氏族のみしか君主になれないとする血統原理を有することが古代の**匈奴の頃から一般的**であり、モンゴル帝国もその伝統を継承した。
- ・ チンギス統原理はモンゴル帝国崩壊後も中央ユーラシアの遊牧民社会に広く根付き、王権の正統性を支える重要な思想として機能したが、チベット仏教の浸透やイスラム教の権威の高まりなどにより**その影響力は徐々に変化**していった。
- ・ チンギス・ハンやその息子、孫たちも征服地で**多くの子孫**を残した。結果としてチンギス・ハンの遺伝子は爆発的に広がり、現代でも1600万人以上に受け継がれている可能性があるとの報告がある。

## 今後の方向性

- ・ モンゴル帝国及びその後の**男系男子踏襲の変遷**について
- ・ 男系男子を支えた**女性の活躍**とその役割について

# 菅沼孝陽：モンゴル帝国の海上交易と琉球の城塞「グスク」の発展



## 問題意識

- 明朝との朝貢貿易で繁栄した琉球王国は、その統一前、13～14世紀に豪族たちが「グスク」という城塞に割拠し、交易活動を行っていた。この「グスク時代」に、琉球が初めてモンゴル帝国によるアジアユーラシアダイナミズムに組み込まれ、繁栄の基礎が築かれたのではないか。

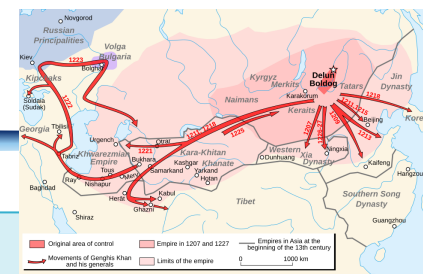
## 研究報告

- 「グスク」は各地に割拠した豪族（按司）の根拠地であったが、「城塞」であるとともに、農業共同体の中心地でもあった。
- 「グスク」はいずれも自然の地形を活かした城塞建築であり、交易に便利な港湾の近くに立地している。これは、交易船の動きを把握し、商人との取引、物資の集散を統括するためと考えられる。
- 対外交易で有利になったグスクが、他のグスクを統合し、「三山時代」を経て「琉球王国」の成立を主導した。
- グスクからは、貝類、木材、薬草などが中国や朝鮮、日本へと輸出され、鉄、陶磁器、金属器、織物などが琉球に輸入された。
- 「グスク時代」がモンゴル帝国期と重なる。この時代の鉄の輸入が琉球を新石器時代から鉄器時代へと進めた。これはモンゴル帝国が東アジアの海洋地域に影響を与えたダイナミズムではないか。

## 今後の方向性

- 沖縄北部（旧北山王国）の今帰仁グスクとモンゴル帝国の関係を探る。（北元のトグス・テムル・ハーンの次男、ディボド（地保奴）が明朝によって琉球に流され、その墓が今帰仁にあるという研究あり）

# 中里健吾：パックス・モンゴリカにおけるモンゴル帝国の広域統治と多民族支配の仕組みから、現代の**組織文化**の在り方を学ぶ



## 問題意識

**モンゴル帝国の成功:** 13世紀、広大な領土と多様な民族を統治し、「パックス・モンゴリカ」と呼ばれる平和と繁栄の時代を築いた。  
**現代組織の課題:** 交通・通信技術が飛躍的に進歩したにもかかわらず、多くの組織は多様性への対応やグローバルな人材マネジメントに困難を抱えている。  
**研究の目的:** モンゴル帝国の統治システムを分析し、現代の組織運営における課題解決のヒントを探る。

## 研究報告

### ① 法による秩序維持：「ヤサ」

チングス・ハンの言行録を基盤とする、ハーンの命令そのものが法となる仕組み。  
帝国全体の結束を促し、厳格な刑法で国内の秩序を維持。  
財産相続の保証により、諸部族が帝国に留まるインセンティブを創出。

### ② 実利的な宗教寛容政策

反乱リスクを最小化し、統治を安定させるための現実的な戦略。  
仏教、イスラム教、キリスト教などを等しく尊重し、聖職者の税を免除。  
被征服民の宗教的権威者を協力者へと転換させることに成功。

### ③ 徹底した能力主義と二重構造

民族や出自を問わず、統治に必要な専門知識を持つ有能な人材を積極的に登用。  
ペルシアや中国の専門家が行政・財政を担う一方、モンゴル人は親衛隊「ケシクテン」を通じて政治・軍事の中枢を掌握。  
ユーラシア大陸を一つの人材市場と捉え、スキルを最適配置する合理的な人材活用を実践。

## 今後の方向性

モンゴル帝国の統治戦略から、現代におけるリーダーシップのあり方や、結果を出すための多様な人材活用（DE&I）のヒントを得る。  
これらの歴史的知見を、現代の組織運営に具体的に応用する方法論をさらに探求していく。

# 中村淳：モンゴル帝国と茶交易ネットワーク



## 問題意識

モンゴル帝国というユーラシア規模の支配体制の下で、いかに**茶**という物質文化が交易・儀礼・思想の交差点として機能し得たか、茶を通じた異文化間の接触と受容のプロセスを各キーワードの視点から多面的に捉えたい

## 研究報告

- ・ 茶の流通経路とシルクロード再編との関係 【キーワード：**流通**】  
雲南・四川などの茶産地から再編されたシルクロードを通じて、中央アジア・中東へ拡張。儀礼・贈答にも利用され、輸送形態の工夫（餅茶など）も進んだ。
- ・ 茶の交易品としての価値と文化的意義 【キーワード：**象徴**】  
茶は単なる飲料ではなく、宗教的象徴や医薬的効果を持つ多機能商品だった。緑茶と紅茶の象徴性や儀礼的価値が、異文化間で再解釈されていった。
- ・ 茶文化の伝播と地域的変容 【キーワード：**受容**】  
ペルシアでは医薬品として、中央アジアでは社交的飲料として受容。各地で独自の茶文化が形成され、「文化的融合」の象徴ともなった。
- ・ 茶とユーラシアの平和：文化的緩衝材としての茶 【キーワード：**緩衝**】  
茶は戦争間の儀礼・外交において「文化的緩衝材」として機能し、多民族間の緊張を和らげる手段となった。ユーラシア的平和の構成要素の一つと考えられる。

## 今後の方向性

上記キーワード・考察点は仮説の域を出ておらず、今後、文献調査等によりその成立性を確認していく

# 五十嵐郁一：パックス・モンゴリカの成立に影響を与えたモンゴル民族の精神文化

## 問題意識

- モンゴル民族の精神文化は「パックス・モンゴリカ」の成立にどのような影響を与えたのか？
- 未来に向けて、分断と対立を超えた安定的国際平和秩序の構築に活かせる教訓とは何か？



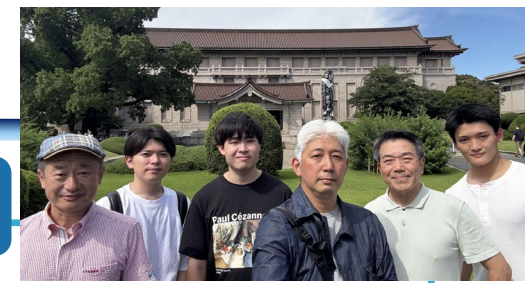
## 研究報告

- モンゴル民族にとって、「**テングリ教**」が「**メタ宗教（※）**」として精神的支柱となっていたことにより、他宗教・異文化の柔軟な包摂が可能となった。
- モンゴル民族社会において、「**母性原理**」が霊性・教育・共同体形成の中心に位置していたことにより、多宗教・多文化的共存を可能にする柔軟な精神文化が育まれた。
- 「メタ宗教（※）」とは、特定の教義や制度宗教を超えて、複数の宗教的価値観や宇宙観を包摂・調和しうる超越的かつ共通基盤的な精神文化の枠組みと定義する。

## 今後の方向性

- 未来に向けた、**新たな国際共生理念の根本的な精神的支柱**となる「メタ宗教」の考察
  - 「テングリ教」と「（原初的）神道」の比較分析～日本の精神文化的イニシアティブの可能性
  - 進化したメタ宗教としての「**科学的自然敬愛精神**」の概念構築

# 5. フィールドワーク実施と計画



## 天理大学附属天理参考館

- ❑ 参加者 : 金先生、菅沼、佐藤
- ❑ 調査内容 :
  - ・ チンギス・ハンの家系図伝来について
- ❑ 実施 : 6月1日

## 東京国立博物館

- ❑ 参加者 : アジアダイナミズム班ゼミ生
- ❑ 調査内容 :
  - ・ 各テーマに応じた資料調査
- ❑ 実施 : 7月19日

## ナーダム祭視察 (モンゴル)

- ❑ 参加者 : 菅沼
- ❑ 調査内容 :
  - ・ 本場のナーダム祭に参加、現地での関連調査を行う
- ❑ 実施 : 7月9-13日

## 研究者インタビュー



- ❑ リーダー : 菅沼、サブリーダー : 佐藤  
※サポート役 : 越田先生
- ❑ 研究者候補 :
  - ・ 上田信 (うえだまこと) : 立教大学文学部 特別専任教授。中国の歴史9 『海と帝国 明清時代』
  - ・ 実施予定 : 10~11月

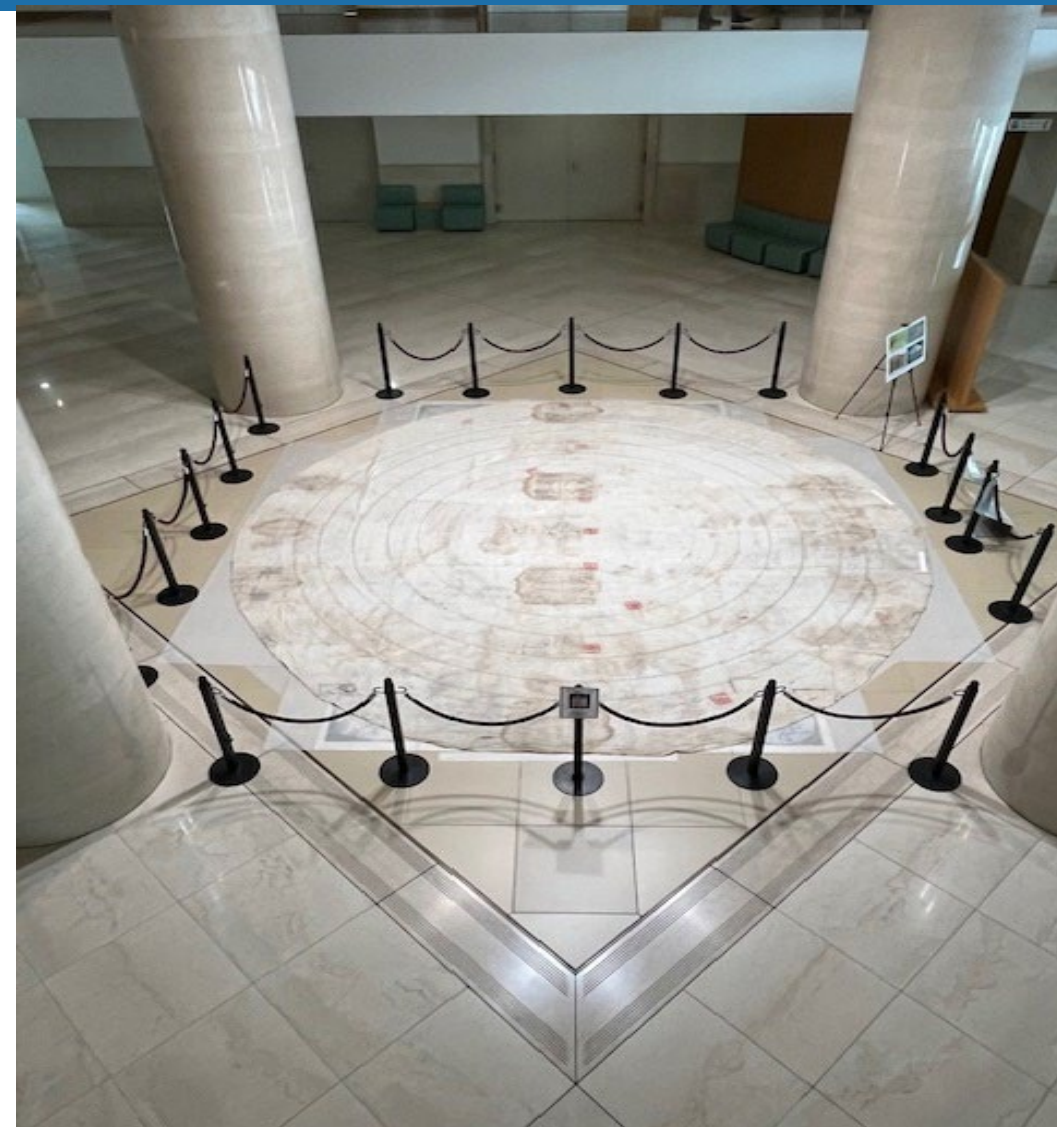
## 天理大学付属天理参考館訪問 世界最大級の家系図 見学/意見交換

- ☐ 面談日時 : 6月1日(日) 13:00~15:00
- ☐ 面談者 : 先方1名 天理大学付属天理参考館 学芸員 梅谷昭範氏(海外民族室)  
当方3名 大学院生(菅沼, 佐藤), 指導教員(金)
- ☐ 内容 : 天理大学創立100周年記念第98回企画展-絆-ヒトとヒトをつなぐモノ-2025年4月16日~6月2日に展示されている**世界最大級の家系図(チンギス・ハンの子孫であるチエチエン・ハーン・シヨロイから始まり14世代に渡る)**の見学及び梅谷学芸員からの本展示内容の解説を頂く
  - ①本家系図が日本、そして天理大学に持ち込まれた歴史的背景は?
  - ②本家系図の特徴は?
  - ③モンゴル帝国にとっての家系図とは?
  - ④モンゴル独立後、ソ連統制下での家系図の位置付けは?



# フィールドワーク 天理大学付属天理参考館

世界最大級の家系図 – 直径555cm 記されているのは14世代11,966人、全て男系男子



## 【本家系図について】

- モンゴル帝国初代皇帝チンギス・ハンの男系子孫である**チェチェン・ハーン・シヨロイ**（1577-1655）を始祖とする家系図

- シヨロイはモンゴル南東部のハルハ部を治めたハーンの一人
- シヨロイ以降の後継者はいずれもチェチェン・ハーンを名乗った

## 【家系図の特徴】

- 家系図の中心にはシヨロイの名前が記されており、そこから**同心円状に赤い線が世代毎**に区切られている
- モンゴル文字+満洲文字**で記載されている
- 文字が染みていないことから、インクには膠（にかわ）を使用しているのではないか
- 朱印は1カ所を除いて布と布のつなぎ目に割印する形で押されており、**偽造防止を目的**にしたものではないか

# フィールドワーク モンゴル国の平和の祭典「ナーダム」2025

古代から遊牧民族に受け継がれた競技大会が、社会主義時代を経て、平和の祭典に

## ナーダムとは

起源は匈奴時代、紀元前3世紀にさかのぼるといわれ、「ブフ（相撲）」「競馬」「弓射」の「男の3競技」が競われる。

現代にも受け継がれ、夏季にモンゴル国、中国・内モンゴル自治区の各地で行われており、2010年にユネスコの無形文化遺産に登録される。

## 国家ナーダム

社会主義時代の1921年に革命記念日である7月11日から3日間、首都ウランバートルの中央スタジアムで「国家ナーダム（イフ・ナーダム）」が国家行事として開催されるようになった。1990年の民主化後も、国を挙げての祭典として続いている。



2025年のナーダムにて、モンゴル国フレルスフ大統領の弓射をご覧になる天皇皇后両陛下  
出典：宮内庁HP

# フィールドワーク モンゴル国の平和の祭典「ナーダム」2025

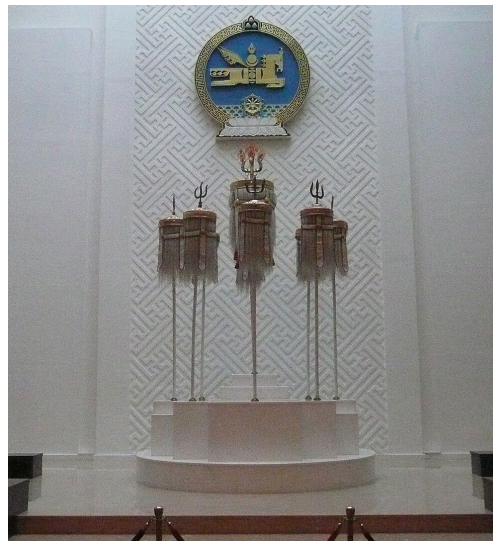
国家ナーダムの主役、チンギス・ハンゆかりの平和の旗「9本の白いトゥグ」

## モンゴル国民統合の象徴「トゥグ」

社会主義体制が終わり、1992年に民主主義に基づく新憲法を制定したモンゴル国は、「チンギス・ハン」を新たな国民のアイデンティティとした。

チンギス・ハンゆかりの「9本の白いトゥグ」を100頭の白馬の毛を使って再現し、憲法で「国民統合の象徴」と定めた。普段は国会議事堂に収められているが、年に一度の「国家ナーダム」に際して、儀仗兵によって街を練り歩いたあと、ナーダム会場に掲げられる。

「戦時の5本の黒いトゥグ」も作られたが、これは国会議事堂から出ることはない。



普段、国会議事堂に置かれているトゥグ  
出典：Wikipedia commons



ナーダムの開会式のため、国会議事堂を出発するトゥグ



ウランバートル市内を行進するトゥグ



ナーダムメインスタジアムに入場するトゥグ

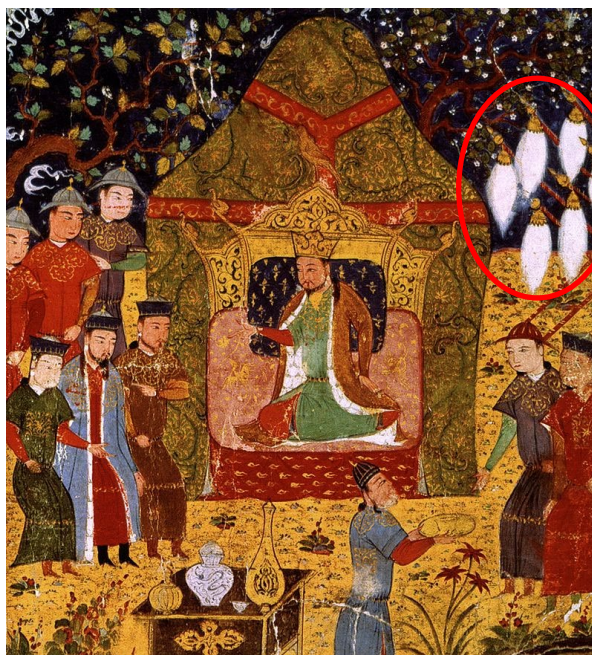
# フィールドワーク モンゴル国の平和の祭典「ナーダム」2025

## 国家ナーダムの主役、チンギス・ハンゆかりの平和の旗「9本の白いトゥグ」

### トゥグの歴史と伝播

トゥグは、チンギス・ハンが1206年に即位した「クリルタイ」で掲げられたという記録のある、三叉戟に布と黄金の傘、馬の毛をつけた権力の印。歴代ハーンの座所に、平時は白色、戦時は黒色のものが掲げられた。

チンギス・ハンのものは9本だが、その後継者は8本を使用した。オスマン・トルコ帝国にも受け継がれたが、チンギス・ハン系の血統ではないため、7本にしたという。クリミア・ハン国では「ブンチューク」と呼ばれ、8本を使用した。ウクライナのコサックを経て、ポーランドでも使用された。



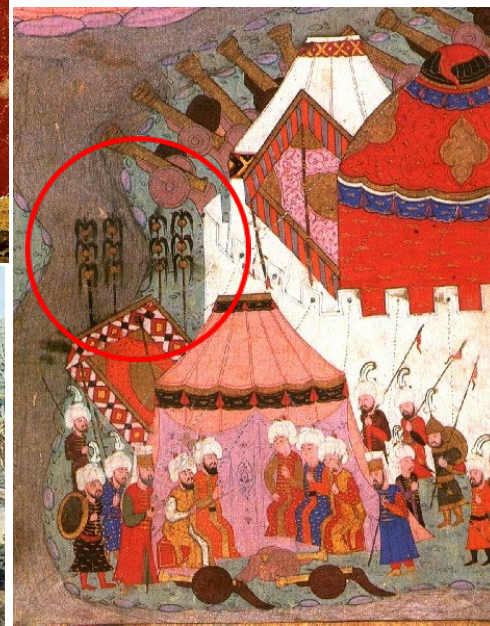
左図：チンギス・ハンがハンに即位した1206年のクリルタイの図。

(ラシードウッディーン『集史』パリ本[14世紀後半]の挿絵)  
出典：Wikipedia commons

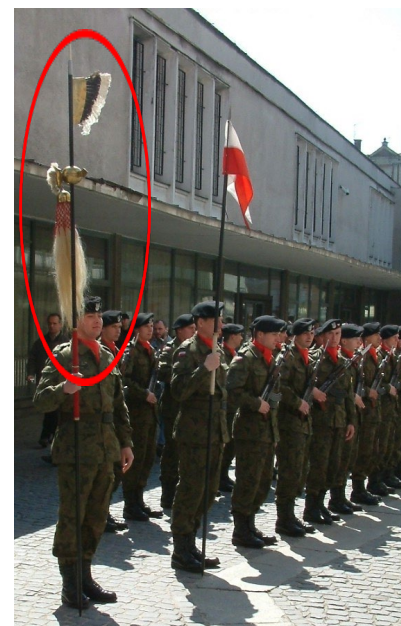
『こうして、フェルトの帳幕をもつ民人を征定して虎の年、オナン河の源頭に集まり、九脚の白旛を立てて、チンギス合罕に「罕」の名をそこに与えた。』  
～元朝秘史（『元朝秘史（下）』小澤重男訳・岩波文庫、p.61）



ウクライナ・コサック（左）とクリミア・ハン国（右）の戦い 出典：Wikipedia commons



オスマンのウィーン包圍（1529）の図 出典：Wikipedia commons



ポーランド軍のブンチューク 出典：Wikipedia commons

# フィールドワーク モンゴル国の平和の祭典「ナーダム」2025

国家ナーダムの開会式では、遊牧民族としてのアイデンティティが強調された



疾走する騎馬からの的を射る騎射



伝統の民族楽器、馬頭琴の合奏



年4回行われる遊牧民族の移動（ラクダに乗せたゲル）



野生馬を捕獲する道具



遊牧に重要な役割を果たす犬



国旗を掲げた騎手が会場を埋め尽くすフィナーレ

## 6. 参考文献 【書籍：計36件】

| 書籍/論文 | 著者                            | 書名  | 出版社                    | 出版年  |
|-------|-------------------------------|---|------------------------|------|
| 書籍    | 1 荒川正晴 他                      | 構造化される世界 14～19世紀(岩波講座世界歴史11)                | 岩波書店                   | 2022 |
| 書籍    | 2 中島幸章                        | 琉球王国の南海貿易「万国津梁」の200年                        | 吉川弘文館                  | 2025 |
| 書籍    | 3 高良倉吉                        | アジアのなかの琉球王国                                 | 吉川弘文館                  | 1998 |
| 書籍    | 4 高良倉吉                        | 琉球王国史の探求                                    | 榕樹書林                   | 2011 |
| 書籍    | 5 上里隆史                        | 海の王国・琉球「海域アジア」大交易時代の実像                      | ポーターインク                | 2018 |
| 書籍    | 6 高梨修・阿部美菜子・中本謙・吉成直樹          | 沖縄文化はどこから来たか グスク時代という画期                     | 森話社                    | 2009 |
| 書籍    | 7 赤嶺守                         | 琉球王国 東アジアのコーナーストーン                          | 講談社選書メチエ               | 2004 |
| 書籍    | 8 外間守善                        | 沖縄の歴史と文化                                    | 中公新書                   | 1986 |
| 書籍    | 9 余並岳生                        | 新琉球王統史2 察度王 南山と北山                           | 新星出版                   | 2005 |
| 書籍    | 10 安里進                        | グスク・共同体・村 沖縄歴史考古学序説                         | 榕樹書林                   | 1998 |
| 書籍    | 11 比嘉佑典                       | 今帰仁御神 女神国の民衆古代史(上・下)                        | ゆい出版                   | 2022 |
| 書籍    | 12 末間泰男                       | 琉球王国の成立と展開 よくわかる沖縄の歴史                       | 日本経済評論社                | 2021 |
| 書籍    | 13 村井章介                       | 古琉球 海洋アジアの輝ける王国                             | 角川選書                   | 2018 |
| 書籍    | 14 岩井茂樹                       | 朝貢・海禁・互市 近世東アジアの貿易と秩序                       | 名古屋大学出版会               | 2020 |
| 書籍    | 15 檀上寛                        | シリーズ中国の歴史④ 陸海の交錯 明朝の興亡                      | 岩波新書                   | 2020 |
| 書籍    | 16 上田信                        | 中国の歴史9 海と帝国 明清時代                            | 講談社学術文庫                | 2021 |
| 書籍    | 17 杉山正明                       | 中国の歴史8 疾駆する草原の征服者                           | 講談社学術文庫                | 2021 |
| 書籍    | 18 森安幸夫                       | 興亡の世界史 シルクロードと唐帝国                           | 講談社学術文庫                | 2016 |
| 書籍    | 19 寺島実郎                       | 人間と宗教あるいは日本人の心の基軸                           | 岩波書店                   | 2021 |
| 書籍    | 20 出口治明                       | 全世界史  | 新潮社                    | 2018 |
| 書籍    | 21 出口治明                       | 哲学と宗教全史                                     | ダイヤモンド社                | 2019 |
| 書籍    | 22 杉山正明                       | モンゴルが世界史を覆す                                 | 日経BPマーケティング            | 2006 |
| 書籍    | 23 杉山正明                       | モンゴル帝国の興亡                                   | 講談社                    | 1996 |
| 書籍    | 24 杉山正明                       | クビライの挑戦 モンゴルによる世界史の大転回                      | 講談社                    | 2009 |
| 書籍    | 25 岡田英弘                       | 世界史の誕生—モンゴルの発展と伝統                           | 筑摩書房                   | 1999 |
| 書籍    | 26 橋海英                        | モンゴル帝国 草原のダイナミズムと女たち                        | 講談社                    | 2024 |
| 書籍    | 27 Jack Weatherford           | パックス・モンゴリカ: テンギス・ハンがつくった新世界                 | NHK出版                  | 2006 |
| 書籍    | 28 吉澤智也                       | 記憶の経験値として生きるソフト・パワーの展開—21世紀のパックス・モンゴリカを求めて— | 日本国際情報学会誌 2巻1号 p.31-33 | 2017 |
| 書籍    | 29 志茂誠敏・智子                    | モンゴル帝国史研究 完篇                                | 東京大学出版社                | 2021 |
| 書籍    | 30 佐藤正衛                       | テンギル・カンの源流                                  | 明石書店                   | 2006 |
| 書籍    | 31 小長谷有紀・前川愛                  | 現代モンゴルを知るための50章                             | 明石書店                   | 2014 |
| 書籍    | 32 小松久男                       | 中央ユーラシア文化事典                                 | 丸善出版                   | 2023 |
| 書籍    | 33 宮脇淳子                       | モンゴルの歴史 遊牧民の誕生からモンゴル国まで                     | 乃木書房                   | 2002 |
| 書籍    | 34 占部俊夫・李托雅                   | モンゴル宮廷茶—テンギス・ハンの飲んだお茶—                      | 三省堂                    | 2022 |
| 書籍    | 35 キム・ホドン                     | モンゴル帝国と世界史の誕生                               | 名古屋大学出版会               | 2023 |
| 書籍    | 36 プリュノ・ブラセル                  | 本の歴史  | 創元社                    | 1998 |
| 書籍    | 37 樺山紘一ほか編                    | 岩波講座世界歴史15: 商人と市場: ネットワークの中の国家              | 岩波書店                   | 1999 |
| 書籍    | 38 影山悦子訳 Vaissière, É. de la. | ソグド商人の歴史                                    | 岩波書店                   | 2023 |

## 6. 参考文献 【論文：計8件】

| 書籍/論文 | 著者                 | 書名   | 出版社  | 出版年  |
|-------|--------------------|--|--|------|
| 論文    | 1 松井大、白 玉冬、橋堂晃一    | 10～14世紀東方ユーラシアにおける古代ウイグル族ネットワークの展開                                     | JFE21世紀財団 アジア歴史研究報告書   | 2015 |
| 論文    | 2 Brose, Michael C | Uyghur Technologists of Writing and Literacy in Mongol China           | T'oung Pao, 2005, Second Series, Vol. 91, Fasc. 4/5 (2005), p. 396-435. Brill  | 2000 |
| 論文    | 3 松川正義             | モンゴル命令文とウイグル文書文化   | 待兼山論叢. 史学篇. 2018, 52, p. 1-27. 大阪大学大学院文学研究科  | 2018 |
| 論文    | 4 松井太              | 中央ユーラシアのネットワークとウイグル商人  | 帝国書院, 2002-01 世界のしおり p.1-7   | 2002 |
| 論文    | 5 松井太              | 文字文化からみた草原とオアシスの世界   | 東洋文化研究第11号 p.455-478   | 2008 |
| 論文    | 6 荒川正晴             | ソグド人の移住聚落と東方交易活動   | 岩波講座世界歴史15：商人と市場：ネットワークの中の国家. 1999, p. 81-103  | 1999 |
| 論文    | 7 Morgan, G.O      | Who Ran the Mongol Empire?   | The Journal of the Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland, 1982, No. 1 (1982), pp. 124-136. Cambridge University Press | 2006 |
| 論文    | 8 Ostrowski, D     | The "tamma" and the Dual-Administrative Structure of the Mongol Empire | Bulletin of the School of Oriental and African Studies, University of London, 61 (2), 262-277.                                     | 1998 |

# 7. 年間スケジュール 春学期

| 回  | 日付        | 議題                                       | 発表者         | 文献調査・フィールドワーク                  | 備考  | 議事録担当 |
|----|-----------|--|-------------|--------------------------------|---|-------|
| 1  | 4月19日     | ・自己紹介<br>・今年度テーマ方向性                      |             |                                | ・春学期スケジュール確定                                    |       |
| 2  | 4月26日     | ・問題意識発表(1)                               | 杉、阿達、菅沼、佐藤  |                                | ・メンバー確定   |       |
| 3  | 5月10日     | ・ゼミ長・副ゼミ長確定<br>・問題意識発表(2)                | 中里          |                                | ・連絡用Classroom作成(中里)<br>・共同作業用Google Drive設定(中里) | 中里    |
| 4  | 5月17日     | ・問題意識発表(3)                               | 菅沼、五十嵐      |                                | ・研究計画発表準備開始(ゼミ長・副ゼミ長)                           | 佐藤    |
| 5  | 5月24日     | ・問題意識発表(4)                               | 中村、佐藤       | 6月1日フィールドワーク(第1回)確定(天理大学附属参考館) | ・役割分担確定   | 菅沼    |
| 6  | 5月31日     | ・問題意識集約(5)<br>・テーマ案検討                    | 中里、阿達       |                                |   | 阿達    |
| 7  | 6月7日      | ・テーマ案検討<br>・フィールドワーク(第1回)報告<br>・発表資料骨子検討 | ディスカッション、佐藤 |                                |   | 杉     |
| 8  | 6月14日     | ・テーマ案確定<br>・研究計画発表資料確定(最終調整)<br>・発表リハーサル | ディスカッション    | ・研究者インタビュー調整                   | ・発表役割&予演日程確定                                    | 五十嵐   |
| 9  | 6月21日     | ・研究計画発表                                  |             |                                |   |       |
| 10 | 6月28日     | ・中間発表準備                                  | ディスカッション    | 〃                              |   |       |
| 11 | 7月5日      | ・中間発表準備                                  | 〃           | 〃                              |   |       |
| 12 | 7月12日     | ・中間発表準備                                  | 〃           | 〃                              |   |       |
| 13 | 7月19日     | ・中間発表準備                                  | 〃           | フィールドワーク(第2回)実施                |   |       |
| 14 | 7月26日     | ・中間発表準備                                  | 〃           | 〃                              |   |       |
| 15 | 8月25日~26日 | ・合宿・中間発表                                 |             |                                |   |       |

# 7. 年間スケジュール 秋学期

| 回  | 日付     | 議題                           | 発表者 | 文献調査・フィールドワーク | 備考                        | 議事録担当 |
|----|--------|------------------------------|-----|---------------|---------------------------|-------|
| 1  | 9月20日  | ・自己紹介<br>・春学期成果共有            |     |               | ・秋学期スケジュール確定<br>・最終メンバー確定 |       |
| 2  | 9月27日  | ・追加メンバー問題意識発表                |     |               |                           |       |
| 3  | 10月4日  | ・追加メンバー問題意識発表                |     |               |                           |       |
| 4  | 10月11日 | ・問題意識集約                      |     |               |                           |       |
| 5  | 10月25日 | ・問題意識集約                      |     |               |                           |       |
| 6  | 11月1日  | ・発表資料骨子検討                    |     |               |                           |       |
| 7  | 11月8日  | ・発表資料骨子確定                    |     |               |                           |       |
| 8  | 11月15日 | ・発表資料準備<br>・論文準備             |     |               |                           |       |
| 9  | 11月22日 | ・発表資料準備<br>・論文準備             |     |               |                           |       |
| 10 | 11月29日 | ・発表資料準備<br>・論文準備             |     |               |                           |       |
| 11 | 12月6日  | ・発表資料準備（最終調整）<br>・論文準備（最終調整） |     |               | ・発表役割&予演日程確定              |       |
| 12 | 12月13日 | ・Active Learning発表祭          |     |               |                           |       |
| 13 | 12月20日 | ・最終発表<br>・年内論文提出             |     |               |                           |       |
| 14 | 1月10日  | ・最終調整                        |     |               |                           |       |
| 15 | 1月17日  | ・最終調整                        |     |               |                           |       |
| 16 | 1月25日  | ・論文最終提出16:00<br>・懇親会17:00～   |     |               |                           |       |



**ご清聴ありがとうございました**